

『蜜蜂と遠雷』

2017年04月20日

恩田陸氏の『蜜蜂と遠雷』が直木賞を受賞した。その後、本屋大賞も受け、ダブル受賞となった。直木賞は文学の専門家たちが文学性を評価しての賞であるが、本屋大賞は普通の本屋たちが、面白いよと読むことを勧める賞である。久しぶりに引き込まれて読んだ。ピアノコンサートという全く知らなかった世界が舞台なので、興味津々であった。

3年毎に開催される芳ヶ江国際ピアノコンクールに秀でた才能を持つ若者たちが集まって来る。これを制した者は世界最高のピアノコンクールで優勝するというジンクスがあった。風間塵は養蜂家の父と共に各地を転々とし、自宅にピアノを持たない16歳の野生児である。彼は耳が良く、一度聴いたら覚えてしまう天才で、彼のヴィヴィッドな演奏は聴衆を魅了する。マサル・カルロス・レヴィ・アトナールは長身で綺麗な19歳、完璧な演奏技術と音楽性を持つ優勝候補と目されるジュリアード音楽院生である。栄伝亜夜は天才少女としてジュニアコンクールを制覇し、CDデビューもした20歳の音大生である。13歳の時、母親が急逝し、ショックでコンサートをドタキャンし、音楽から遠ざかっていたが、このコンクールに再起をかけていた。高島明石は音大出身であるが、楽器店に勤めるサラリーマンで、妻子もあり、寝る間を惜しんで練習して出場してきた。コンクールの年齢制限ギリギリの28歳である。これらの4人を核とし、コンサートに臨む若者たちと彼ら、彼女たちを支える家族、教師、友人たちの関りを生き生きと描き出している。

若いコンテスタントたちの張りつめた緊張と大きな望みは、読む者に同じ思いへと誘い、思わず手に汗を握るような感覚になる。音楽にかけた若者たちの執念と狂気、音楽の強さと奥深さを改めて知らされた。恩田氏は音楽を、「一音一音にぎっしりと哲学や世界観のようなものが詰めこまれ、なおかつみずみずしい。それらは固まっているのではなく、常に音の水面下ではマグマのように熱く流動的な理念が鼓動している。音楽それ自体が有機体のように『生きて』いる」と言う。彼女の音楽を言葉で著す巧みに圧倒された。演奏される曲に対し、多様な言葉と表現で、聴いているつもりにさせられる。「モーツァルトの、すっと突き抜けた至上のメロディ。泥の中から純白の蕾を開いた大輪の蓮の花のごとく、なんのためらいも、疑いもない。降り注ぐ光を当然のごとく両手いっぱい受け止めるのみ。」「ホールに、神々しい大伽藍のようなバツハの響きが降臨していた。あの、恐ろしく緻密で計算された、和声の積み上げられた建築的にも完璧な響きが、揺るぎない骨格で迫ってくる。」ここまでは分かるが、以下は理解できない。「悪魔のようだ、と三枝子（審査員）は思った。恐ろしい。おぞましい。三枝子は激しく動揺し、感情を揺さぶられたが、徐々にそれが激しい怒りに変わっていくことに気づいていた。」音楽をこのように受け止めるのかと驚いた。第一次から第三次までの予選があり、残った6名で本選を争う熾烈な戦いである。コンテスタントたちは緊張と恐怖でピアノの前に座るが、弾き始めると大好きな音楽に陶醉していく。そこに、醸し出される様々な風景、壮大な物語をも連想させる。一位はマサル・カルロス、二位は栄伝亜夜、三位は風間塵、音楽に捕らえられた神童、天才たちである。彼ら、彼女たちの大きな成長を祈りたい気持ちになった。

音楽音痴の私も、演奏者の気持ちと聴き方について知らされ、今後、コンサートに行く時には違う聴き方ができるのではないかと期待を持たされた。今まで行ったコンサートで、ドイツのドレスデンのザクセン州立歌劇場で、シャルル・デュトワが踊るように指揮をし、聴衆が本当に楽しそうに聴いていたコンサートが一番印象に残っている。